

Happy New Year  
2016

## 【神の祝福をいただける姿勢】

聖書:創世記12章4-9節・暗唱聖句:詩篇67篇1節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

新年あけましておめでとうございます。新年も主のすばらしい祝福と恵みが信仰の家族のみなさんの上にあふれますようにお祈り申し上げます。

旧約聖書で信仰の先祖と言われるアブラハム(アブラムからアブラハムに変る)がいますが、新年はこのアブラハムがいただいた祝福を私たちもいただくために彼が神の御前でどんな信仰でいたのかをともに考えて見たいと思います。創世記12章で神様はアブラハムに“あなたは、あなたの生まれた故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。(1節)”と仰せられました。同時にすばらしい祝福も仰せられました。本文は神からこのお言葉を頂いたことに対してアブラハムがどのように反応したのかを記録しています。これが聖書に書かれたのはアブラハム個人の祝福された話ではなく、神を信じるクリスチャンたちがどう生きれば祝福されるのかその原則を教えるためであります。

1. 先が分からなくても神様の言われたとおりに従いました。

本文の4節に“アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。”と書かれています。これをヘブル人へ手紙11章8節では“信仰によって、アブラムは相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。”と記録しています。これはつまり、アブラムが“故郷と親戚、父の家”を出るとき、何も聞かず、問わず、ただ神の命令に従ったと言う意味です。アブラムはなぜ出て行かねばならないのか、どうやって行くべきなのか、どこに向かうべきなのか、そこはどんな人々が住んでいるところなのか、何を準備して行くのかなど神に問わず、ただ出て行ったわけです。これは決して容易い事ではなかったでしょう。非常に恐ろしい出来事だとも言えるでしょう。なぜなら、当時の背景では考えられないことだからです。当時はこんにちのように国の統治力や法に従って社会秩序が維持されるのではなく、力で支配される時代でした。ですから、力がなければ、困るので、力があるためには多くの人と一緒にしなければなりません。なのに、故郷と父の家を離れて、出て行くことは、一人ぼっちになることになり、生存競争では生き残れない危険な状態になる事を意味します。ですから、それは自らほかの人の奴隷になるか、持ち物を全部奪われる危険性をともなうとっても愚かな考えに違いなかったと思います。なのに、アブラムは神に言われた通りに迷わず、悩まず、考えすぎずただ出て行きました。

## しかも一人で出て行ったのではなく、父テラと妻とおいでであるロトと一緒に連れて行きました。(創世記11:31)

ここで、気になることはアブラムが自分の妻と父とおいを連れて行くためにどうやって説得したかです。当時は絶対的父中心の社会だったので、お父さんが行かないとしたなら、仕方なく動けないのは当然のことでした。たしかなのは神様はほかの人ではなくアブラハムに仰せられました。ですから、神様の御声を聞いてない彼らに“主が出て行きなさいと仰せられた”と言っても理解できなかったはず。そして、ヨシュア記24章2節で“アブラハムとナホルとの父、テラは昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。”と書かれています。ですから、アブラハムの父テラはウルに住んでいる時、神様を知らない人でしたので、神様が出て行きなさいと言われても純粋に従うことは出来なかったと思います。それだけではなくヘブル人への手紙11章8節で“信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。”のように実はアブラハムすらどこに行くべきなのかすら知りませんでした。

ですから、愛するみんな、アブラハムが故郷を離れたと言うことはとっても理解しがたいですが、とにかく4節で“アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。”と書かれています。これは言い換えると神を信じる信仰と言うのは単純であるべきという意味です。なぜなら、神様は理解の対象ではなく信仰の対象だからです。神様の御言葉は我々が自分の頭では全部理解できることは出来ないと思います。しかし、神様が我々に言われることは我々を愛したゆえに、我々に有益を与えるために言われることなので、問わずに従えば、生きておられる神のすばらしい祝福をたしかに受けたということを聖書全体と基督教歴史を通して知る事ができます。

2. 神様の御言葉と約束を絶対的に信頼し続けました。

本文の5節で“アブラムは妻のサライとおいのロトと、彼らが得たすべての財産と、ハラン(という地)で加えられた人々を伴い、カナン地に行こうとして出発した。こうして彼らはカナン地に入った。”ここで、興味深いところが出ていますが、アブラムが神様に従って自分の故郷ウルから離れて始めに定着したところがハランという地でした。ところが、アブラムがウルを出た時がいつなのかははっきり書かれていませんが、ハランを離れて、カナン地に行く時アブラムは75歳だったと書かれています。ですから、アブラハムがカランで何年間くらしたのかは正確に分りません。ただ“彼ら得たすべての財産とカランで加えられた人々を伴い”と書かれたのはハランで成功して、まもなく相当の財産を得たと言う意味です。これはつまり、ハランというところは人が住むのにはとっても快適という意味です。なのに、アブラムが再び、ハランを離れると言うことはさらに決して容易なことではありませんでした。しかし、アブラムはまたハランを出て、カナン地に入ろうとしたのです。

確かなのはカナン地はカランにくらべるといろんな面で劣悪(れつあく)な地域です。

① ハランは水も多く、気候も良く、土地は肥沃(ひよく)で、広い平野で人が住むのにはとっても快適な環境ですが、カナ

ンの地は水は少ないし、暑いし、山岳地帯で人が容易く住む環境ではありません。

② ハランは文化的とっては発達しましたが、カナンカナンの地は未開な地域です。

③ ハランからカナンまでの距離は約480kmほどで、交通が不便だった当時では多くの財産と雇い人たちを連れて引越すと言うことはとても難しいことです。

**なのに、みなさん！アブラムはなぜまたハランを離れ、カナンカナンの地に行こうとしたのでしょうか？**

聖書にはこれについて特別な解説がないのでただ推測するしか、ほかは分る手がかりがありません。

アブラムは故郷ウルを離れる時、神様が示す地がどこなのかははっきり分りませんでした。しかし、神様が“ここが約束の地だ、ここで住みなさい。”とはっきり仰せられるまで行こうとしたと思います。しかし、父テラと一緒に動いたので、父が“ハランは平地で、水も多く、土地は肥沃で、住みやすいのでここで住もうではないか”と言われ仕方なくカランカランの地で定着したはずで、そして、父テラの予測どおりハランでの生活は成功でした。しかし、アブラムの内心は神様から“ここが約束した地だとかここで住みつきなさい！”と言われる御声を聞いてなかったため、ハランで完全に住み着きたくなかったと思います。

そういうわけで、アブラムは父テラが死んだ後、神様が“ここだ、ここで住みなさい”と言われる所を見つけるために、ハランを離れて、カナンカナンの地に行こうとしたかも知れません。ですから、アブラムがハランからカナンカナンの地に行った言うことは彼がただ神様のお言葉とその約束のみを絶対的に信頼したからです。これが大切です。聖書にはこのような話が色々と記されています。

たとえば、ヨハネの福音書9章1-11節によると、イエス様が道の途中で生まれつきの目の見えない人を見て、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られ、彼の目に塗ってシロアムの池で洗うように言われました。つばきをして泥を作ったことは確かに、きたないし、目の見えない人がシロアムという池を探していくことも簡単ではなかったはずで、しかし、盲人は“なぜ、きたない泥を目に塗ったのか”と抵抗もしなかったし、つぶやかずに、イエス様のお言葉通りにシロアムの池にまで行くことに従いました。その結果、盲人は見えるようになりました。ですから、信仰の人になるためには神様の御言葉とその約束を限界がある自分の頭で理解しようとしなくて、絶対的に信頼し、シンプルにそのまま従えば、かならず、神の祝福は伴われでしょう。

**3. 神のみを信頼して周りに左右されず、周りを変えて行きました。**

本文の6節で“アブラムはその地を通して行き、シェケムシェケムの場、モレの樫の木のところまで来た。当時、その地にはカナン人がいた。”と記録されています。アブラムの一行はハランを出て、シェケムシェケムの地に無事着きました。ところが、シェケムシェケムの地にはすでにカナン人たちが住んでいたのです。ここで“カナン人”はハムの子孫としてセムの子孫であるアブハムとは決して一つになれない敵対関係だと言えます。なぜなら、カナン人たちは偶像を拝む民族だからです。神様がアブラムにカルデヤのウルから出て行くようにと命じられたのはそこが偶像を拝んでいる所だったからです。せっかく、偶像を拝んでいるところから出て来てカナンカナンの地に来たのに、カナンカナンの地も偶像を拝んでいるので、決して神様を信じ、信仰生活するのに良い環境ではありません。ここで、覚えておきたいことはこの世はどこに行っても罪は満ちていると言うことです。

時に我々は環境だけ変えれば、全てが新しく出来るかのように思い込んでしまう時がありますが、慣れて見れば地上で環境はそんなに違いない事に気付かされるのではないのでしょうか。結局どんな環境かではなく、今自分がどんな信仰を持っているか、今神様との関係でいるかが大切である事がわかります。

大切なのはアブラムは神様になぜこんなところに連れてきたのか、つぶやいたり、抵抗しませんでした。それはどんな意味でしょうか。カナンカナンの地は確かに偶像を拝んでいるところですが、アブラムの中には真の神を信じ、真の神の確実なお言葉と約束を信じ従っている自分ですから、ここを神様に仕えるところに変えられる、そして自分が変えて行くという信仰の確信があったのではないのでしょうか。ですから、信仰生活をするのに、良いところばかりを捜し、求めなくて、信仰によって勇敢に進み、戦って勝たなければなりません。そういうわけで、クリスチャンは罪あるこの世から逃げなくて、信仰によって勇敢にチャレンジして突破してむしろまわりを変えて行く人に違いありません。真の全能なる神を信じているから、その神の御言葉と約束を頂いている者だからという信仰の確信が我々を勇敢にさせてくれるのではありせんか。

温度計ではなく、温度調節計(周りの温度に左右されず却って自分で調節して行く)になりましょう。

たとえば、ヨセフはエジプト人ポティファルポティファルの家で奴隷生活をしている時、ポティファルポティファルの妻が彼を誘惑しましたが、彼の信仰と御言葉で罪と誘惑の環境と戦ってさらなる祝福を頂きました。ですから、より良い場所より良い環境を捜すより、神の御言葉と信仰の確信を得てそれによって罪と戦って行く事がもっと大切です。地上では完全ではなく、問題もあり、難しいこともあります。しかし、今年もこの神の御言葉を絶対信じ、いつも覚えて置きましょう。

箴言16章9節で“人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。”、そして、ローマ人への手紙8章28節では“神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。”と言われました。

アブラムは神様が示す地はもっと良いところだと思って、カナンカナンの地まで来ましたが、環境は期待した通りではなく、思わしくないところでした。しかし、劣悪な環境をうらまなくて、再びハランハランに戻らないで、環境を乗り越え、変えて行きました。

愛するみなさん！新しい2016年もまず神により良い環境や条件を求める前に、生きておられ、いつも共におられる神様を絶対信頼し、いつも神のお言葉と約束を頂き頼りて、回りを新しく変えて行く祝福の年となりますようにお祈りします。愛するみ

なさんがアブラムのように神の祝福の源と水路になってみなさんを通して周りが変わり、祝福される一年となりますように切に祈ります。

#### 4. どこに行っても神に祭壇を築きました。

本文の7節で“そのころ、主がアブラムに現われ、そして「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」と仰せられた。アブラムは自分に現われてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。”と書かれています。創世記12章1節では“わたしが示す地へ行きなさい。”と漠然とした表現でしたが、本文では“この地”と言ってカナン<sup>1</sup>の地こそが神様が示す地であるとはっきりと教えて下さいました。ところが、カナン<sup>1</sup>の地をアブラムに与えたわけではありません。神様はアブラムに“あなたの子孫に、わたしはこの地を与える”とおおせられたのです。

これを新約聖書の中使徒の働き7章4節～5節で“そこで、アブラハムはカルデヤ人の地を出て、ハランに住みました。そして、父の死後、神は彼をそこから今あなたがたの住んでいるこの地にお移しになりましたが、ここでは、足の踏み場となるだけのものさえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。それでも、子どももなかった彼に対して、この地を彼とその子孫に財産として与える事を約束されたのです。”と記録していますが、大切なのは神様はアブラハムに“あなたの子孫に、わたしはこの地を与える”と仰せられた時、アブラハムはそこで祭壇を築いた(神に礼拝をささげた)と言うことです。もっと正確に訳すと“するとすぐ、彼は築いた”という意味です。つまり、神様から仰せられたアブラハムはすぐさま、その場で祭壇を築いたということです。そして本文の8節も“彼はそこからベテルの東にある山のほうに移動して天幕を張った。西にはベテル、東にはアイがあった。彼は主のため、そこに祭壇を築き、主の御名によって祈った。”そして、創世記13章18節にも“そこで、アブラムは天幕を移して、ヘブロンにあるマムレの榿(かし)の木のそばに来て住んだ。そして、そこに主のための祭壇を築いた。”ここで“祭壇を築いた。”というのは神様にいけにえをささげたという意味で、すなわち、神様に礼拝をささげたという意味です。アブラハムは行くところどころで祭壇を築きました。これはとつても大切です。

なぜなら、アブラムが慣れない異国の地で旅人の生活をしながら、神様への信仰が少しも揺るがされなかった理由はまさしく、神様に祭壇を築く事をきちんとしたからです。

ある神学者は“神に礼拝を捧げることに成功すればすべてに成功し、礼拝に失敗すればすべてに失敗する”と言われました。さらに、本文の7節に“自分に現われてくださった主のために”と書かれています。これは神様からこの地を与えられると言われたからありがたい気持ちで祭壇を築いたのではなくただ、主のために祭壇を築いたという意味です。神様から約束されたカナン<sup>1</sup>の地はカルデヤウルやカランには比べられないほど劣悪な地だったので、感謝よりか不平、不満を言えるアブラムでした。それにもかかわらず、アブラハムが祭壇を築いたのは“主が望まれるなら、ここで神様に仕えながら暮らします。”という神様中心の徹底した信仰を表します。

これを本文の9節で“それから、アブラムはなおも進んで、ネゲブのほうへと旅を続けた”ここで、ネゲブは“荒地”のところ<sup>2</sup>です。カナン<sup>1</sup>の南は石と砂だけの荒れ果て地なのに、アブラムはなぜまた進んで行ったのでしょうか？

その理由はアブラハムは神様のお言葉に従って、カナン<sup>1</sup>の地まで来て、“この地をあなたの子孫に与えよ”という約束も頂いたのに、カナン<sup>1</sup>の地はすでにカナン<sup>1</sup>人たちが住んでいて、なおさら、カナン<sup>1</sup>人たちはアブラムがそこに来る事を好まなかったからです。そういうわけで、アブラハムは人々が住んでない南のほうへと移動するしかありませんでした。想像するだけでもアブラムのカナン<sup>1</sup>の生活は楽ではありませんでした。むしろ苦しいし、大変だったはず<sup>3</sup>です。そのような生活や環境においてもアブラムが主への信仰から離れなかったのは行くところどころで、まず祭壇を築いたからです。ですから、信仰生活において一番大切なのは礼拝です。

礼拝が神の祝福を頂ける道に間違いありません。礼拝中心の信仰生活に成功しましょう。2016年にはさらに礼拝に心、思い、力、最善を尽くすことにより、アブラムのように神にさらなる祝福を頂、祝福された一年となる全クリスチャンプレイズチャーチの神の家族となりますように心からお祈り申し上げます。アーメン！